それでも認めないトップ

写真は朝日新聞 5 月 26 日朝刊「池上彰の新聞ななめ読み」。加計学園「文書」問題に迫る。

5 月 16 日の夜 7 時、NHK ニュースが「秋篠宮ご夫妻の長女の眞子さまが、大学時代の同級生の男性と婚約される見通し」という特ダネを報じました。これを受けて新聞各紙は翌 17 日の朝刊で追いかけます。各紙 1 面トップで報じる中、異彩を放ったのが朝日です。「眞子さま婚約へ」という記事は 2 番手で、1 面トップに加計学園の新学部は「総理の意向」という別の特ダネをもってきたからです。‥‥朝日は独自路線を選択しました。いい判断でした。

朝日が報じた文書について、同日午前、菅義偉官房長官は「どういう文書か。作成日時だとか、作成部局だとか明確になってないんじゃないか。通常、役所の文書はそういう文書じゃないと思う」と語ったそうです(18 日付朝日朝刊)。官房長官は怪文書扱いしたのですね。不思議な対応です。

本来、このような重大な事実を推測させる文書の存在が報道されたら、「重大な問題を提起している。早速事実関係を調べてみたい」と答えるべきなのではないでしょうか。それが、怪文書扱いして、何か不都合なことがあるからではないかと思ってしまいます。この官房長官の記者会見でのコメントに、朝日は事実をもって反論します。18 日付朝刊で、作成日時と「対応者」の 4 人の実名が書かれていると報じたのです。さあ、こうなったら、実名が記された人たちは、なんと答えるのか。朝日は 19 日付朝刊で伝えています。18 日の国会答弁で、「わからない」「記憶はない」と繰り返したというのです。さらに 20 日付朝刊で、文科省が文書の存在を調べたが「存在は確認できなかった」と松野博一文科相が発表したと報じています。「個人が省内で使っているパソコンは調べなかった」というのです。これを調査というのか。都合の悪い文書の存在が明らかにされたため、関係者たちが右往左往している様子がわかります。

この対応に朝日は追い打ちをかけました。25 日付朝刊で文科相の前川喜平前事務次官のインタビュー記事を掲載。事務次官在職中、問題の文書を見たと証言したのです。怪文書ではなくなりますが、松野文科相は 25 日の参議院文教科学委員会で、「すでに辞職された方の発言であり、文科省としてコメントする立場にない」述べています。何としても認めたくない。教育行政のトップは、こういう人なのです。

(2017 年 5 月 29 日)